

## 第6章

# 訪問国活動の成果



# 訪問国活動

## ねらい

航海中に実施される訪問国活動を通じて、以下の点を学び、身に付けることが期待された。

- 表敬訪問やレセプションなどの公式行事を通して、国際儀礼（プロトコル）を身に付ける。
- ディスカッションのテーマに関連した施設を訪問し、その国での取組について学びを深める。
- 各種施設を訪問し、その地域における文化や歴

史、社会情勢について学びを深める。

- 現地青年との交流を通じ、国際理解を深め、国際親善を図る。

参加青年は、訪問国活動中、積極的に地元青年と交流を図り、コース・ディスカッションの学びを踏まえて課題別視察に臨み、また、視察先での学びをその後のディスカッションに還元することが期待された。

## インド訪問国活動の成果

インドにおける活動が「インドの歴史や現状、文化や人々のことへの理解に役立ちましたか」との設問について、5段階評価の5（大変役に立った）又は4（役に立った）と答えた者の割合が68%であった。インド传统文化の理解を深めるために訪れたカラクシェトラ芸術学院については、5（大変良い）又は4（良い）と答えた者の割合が76%と高い評価が出ており、「カラクシェトラ芸術学院では、上質な踊りを多く見学し、とても親切に教えてもらった。インドの踊りは今まで見たことがなかったので、非常に興奮した。（日本参加青年）」とのコメントがあった。ラジブ・ガンディー国立青年育成機構（RGNIYD）については、5（大変良い）又は4（良い）と答えた者の割合が72%であり、「彼ら（RGNIYDの生徒）と共に語り、友情を育む時間はあっという間に過ぎ去った。（日本参加青年）」とのコメントがあった。課題別視察においては5（大変良い）又は4（良い）と答えた者の割合が52%であった。地元青年との交流については「インドを更に発見するための課題別視察がもっと多ければ良かった。現地のお宅を訪問する機会があれば嬉しかった。（バーレーン参加青年）」、「もし可能であれば、人々の暮らしについてもっと多くを知りたい。現地の学生と議論する時間を更に持ちたかった。（日本参加青年）」とのコメントがあり、インドの訪問国活動においては、

ディスカッションの場と地元青年との交流をより多くもつことが効果的であるといえる。

訪問国活動での全日程を通して、参加青年からは「一番の思い出は人々のおもてなしだ。皆が非常に親切だったのでとても感謝している。自らの人生を考え、変化する大切な機会になった。将来、特に子供の教育や老人介護を通じて社会へ貢献したい。（日本参加青年）」、「インドの文化と現状を深く知る大変良い機会だった。活動を通じて、単に旅行したり一人で調査したりするだけでは学べないであろう多くのことを学んだ。（日本参加青年）」というコメントがあった。

訪問に際しては、馬場誠治チェンナイ総領事から、寄港地であるチェンナイは本事業の本来的目的に照らして理にかなった目的地であるとの歓迎の言葉があった。また、長期の船上研修が実現したことにより、訪問国であり参加国の一つでもあるインドの参加青年と日々の交流から相互理解を深めることができ、訪問国活動での理解がより一層促されることにつながったのではないかと考えられる。

また、インドでは、連日にわたり地元英字紙及びタミル語紙（The Hindu紙、Daily Thanthi紙、DT Next紙、Dinakaran紙、The New Indian Express紙）に報道された。

## スリランカ訪問国活動の成果

スリランカにおける活動が「スリランカの歴史や現状、文化や人々のことへの理解に役立ちましたか」との設問については、5(大変役に立った)又は4(役に立った)と答えた者の割合が95%であった。スリランカ政府国家青年サービス会議(NYSC)での活動については、5(大変良い)又は4(良い)と答えた者の割合が85%であり、課題別視察においては5(大変良い)又は4(良い)と答えた者の割合が81%であった。

課題別視察においては、「盲・ろう学校のクラスは少人数で、生徒一人一人に対して十分な学習指導が行き届いていた。子供たちは非常に満足しているようだった。日本の盲ろう学校についてももっと知りたい。(日本参加青年)」「宝石ビジネスの全てと取引について学べたり、他に例を見ないものだった。最も印象的だったのが、運営のすばらしさだった。全てがスムーズだった。(タンザニア参加青年)」というコメントがあった。

また、スリランカではホームビジットを行ったが、この活動に関し、5(大変良い)又は4(良い)と答えた者の割合は

88%であった。「ホームビジットはすばらしかった。世界は一つだと感じた。国や海に境界線があるのは地図上の話だ。(日本参加青年)」「別れ際にホストファミリーも私も涙を流した。私たちは家族になった。(日本参加青年)」というコメントがあった。参加青年は地元の人々がどのような生活を送っているのかという現状を学ぶことができたといえる。

訪問国活動での全日程を通して、参加青年からは、「戦争、テロリズム、貧困等、スリランカの歴史について、今後答えを出すべき様々な課題を得た。(日本参加青年)」「このプログラム全体が自分の人生を変えてくれる出来事になるだろう。(インド参加青年)」というコメントがあった。また、スリランカ政府国家青年サービス会議W.G.Sエランダ代表からは、スリランカで本事業の実施が行われたことへの感謝の言葉があった。

スリランカでは、連日にわたり同地英字紙及びシンハラ語紙(The Island紙、Daily Mirror紙、Dinamina Newspaper紙)に報道された。

# インド (チェンナイ)

2月9日 (1日目)	
15:00	チェンナイ港到着
15:00	入国審査
17:15 18:00	ラジブ・ガンディー国立青年育成機構(RGNIYD)及びSWYAAインドによるオリエンテーション
19:00 21:00	船上レセプション
2月10日 (2日目)	
8:15	コース・ディスカッションごとにバスに集合
10:30	カラクシェトラ芸術学院到着
10:30 12:30	カラクシェトラ芸術学院にてインドの様々な芸術、文化を視察 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 舞台公演</li> <li>- カラクシェトラ芸術学院散策</li> <li>- 織物部門視察</li> </ul>
12:30 13:30	カラクシェトラ芸術学院にて昼食
13:30 14:30	コース・ディスカッション別にそれぞれの視察先へ移動
14:30 16:30	コース・ディスカッション別課題別視察 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 地域づくりコース: ザ・パニアン</li> <li>- 防災コース: アンナ大学 防災管理センター/リモート・センシング研究所</li> <li>- 教育コース: MOP ヴァイシュナヴ女子大学</li> <li>- 環境コース: インド工科大学マドラス校 インド・ドイツ持続可能性センター</li> <li>- 情報・メディアコース: プラサド・フィルム・テレビアカデミー</li> <li>- 青年起業コース: インド工科大学マドラス校 イノベーションセンター</li> </ul>
17:30	帰船
18:00 19:30	船内で夕食
2月11日 (3日目)	
8:15	レター・グループごとにバスに集合
8:30	チェンナイ港出発
午前	RGNIYD訪問
10:30 11:00	伝統的な歓迎式典
11:00 11:15	公式歓迎式典及び概要
11:15 12:45	文化プログラム (ミニ・ナショナル・プレゼンテーション)
12:45 14:15	RGNIYDにて昼食
14:15 16:30	RGNIYDにて学生とのディスカッション・プログラム
18:30 21:00	ザ・パーク・チェンナイ・ホテルにて青年スポーツ省主催夕食会
2月12日 (4日目)	
9:00 14:30	フリータイム(フェニックス・マーケット・シティで解散)
14:30 15:30	フェニックス・マーケット・シティからっぽん丸までバス移動
16:00 18:00	出国審査
18:00	出航

2月9日、15時にチェンナイ港に入港すると、インド政府関係者、ラジブ・ガンディー国立青年育成機構(RGNIYD)職員、既参加青年(ex-PY)たちが盛大に船を出迎えた。

船内でのオリエンテーションの後、19時から船上レセプションが行われた。

馬場誠治在チェンナイ日本総領事及びラタ・ピライRGNIYD所長が挨拶をされた。続いて、参加青年(PY)代表としてインドのナショナル・リーダー(NL)であるマンブリート・ウパル氏が挨拶をし、上村秀紀管理官より乾杯の発声が行われた。

PYは、在チェンナイ日本総領事館職員及び現地関係者等多数の出席者と懇談し、インドでの国際交流や過去の経験等について、知見を広める機会となった。

全PYは2月10日の午前から昼食時間まで、カラクシェトラ芸術学院を訪れた。カラクシェトラ芸術学院は、古典舞踊や伝統音楽保持のために設立されたアカデミーであり、学院全体で約2,000名が在籍している。

到着すると、職員から歓迎があり全員にスナックとドリンクが振る舞われた。PYはガジュマルの木の下で行われていた礼拝の様子や舞踊の練習風景を見学し、学院内の講堂の舞台で行われた古典舞踊を鑑賞した。学院長が設立の歴史や授業内容について説明した。質疑応答では、生徒の日課や卒業後の進路等について多くの質問があった。

学院の工芸センターでは、機織りや木彫りの版で布地に模様を付ける伝統工芸品の制作風景を見学した。PYは、職人が織り機を使って巧みに布を織り上げていく様子や、スタンプを押すように布地に隙間なく模様を付けていく技法に感銘を受けた。

PYは、この訪問を通じてインドの伝統文化に触れ、伝統文化を守り、後世に伝えることの大切さを学んだ。



午後は、六つのコース・ディスカッションに分かれて課題別視察を行った。各コース別の活動は以下のとおりである。

地域づくりコース：ザ・バニアン (BALM: The Banyan Academy of Leadership in Mental Health)  
地域づくりコースは精神病の専門施設であるザ・バニ

アンを訪問した。主に精神病を抱えるホームレスの女性の尊厳・安全・人権を確保することを目的とし、医療ケアと福祉ケアのサービスを提供している。創設直後、ザ・バニアンの創設者は自分たちの2LDKのアパートを精神病介護施設に改造し、精神病を抱える人々と一緒に生活することで、彼らの目線に立って現場のニーズを理解しようと努力した。その精神は23年後の今も生き続けている。PYは、この団体の活動が対象ユーザーに寄り添い耳を傾けニーズを汲み取るところから始まることを学んだ。

ザ・バニアン創設初期の活動は精神病の問題に特化していたが、精神病患者への理解が深まるにつれ、精神病、貧困、ホームレスはそれぞれ因果関係があり負の連鎖を生み出していることに気が付いた。そのため、扱う問題の範囲を精神病、貧困、ホームレスの三大問題に拡大した。一時的な病気の回復ではなく、精神病患者の幸福や健康を長期的に見守っていくために、現在160人を定員として、シェアハウスを運営している。医療や福祉を組み合わせ、治療のみならず、保護施設、生活面での援助、そして社会保障のアクセスの仕方を周知する役割を担う、包括的なアプローチを実践している。こうした活動の歴史は、地域課題の根本的原因を理解するには寛大な心と長い時間をかけて課題と向き合う忍耐力が必要とされるということ、具体例で示してくれた。

質疑応答で複数のPYから資金調達・実証的な研究・社会保障制度などの政策立案に関する質問が上がった。ザ・バニアンにとって持続可能な事業計画の一環として、最近、四つの修士課程コースを設置したことの説明があった。次世代の精神科医、ソーシャルワーカー、医療スタッフの教育と育成に取り組み、一方で、保護施設のオペレーションの一部は、このBALMの学費で補助している。またザ・バニアンでは施設利用者を対象とした研究にも取り組み、その成果を社会保障制度などの政策立案に役立てたいと今後の展望について語った。

経済的に急成長しているインドだが、今回の訪問国活動で70%の人口が1日2ドル以下の生活を強いられ、そのうち38%の人口が貧困ライン(最低限の生活ができる水準)を下回る貧困層であることを知った。貧困・ホームレス・精神病などインドが抱える社会問題は多様で複雑であり、政府の対策が行き届かないところでザ・バニアンのような地域の取組が非常に大きな役割を果たしていることをPYは再認識した。

防災コース：アンナ大学 防災管理センター/リモート・センシング研究所 (Institute of Remote Sensing and Disaster Management Center, Anna University)  
チェンナイにおいて、防災コースはアンナ大学、防災管理センター及びリモート・センシング研究所を訪問した。始めにラマクリシュナン教授より、インドにおける

主な自然災害の種類と、その被害状況に関する講義を受けた。これには、2004年に発生したスマトラ沖地震に伴う津波を始め、地震、火災、土砂崩れ、ハリケーン、そして2015年12月に発生したチェンナイでの洪水についても含まれていた。こうした自然災害への対策として、干ばつを予測する土壌湿度のモニタリング技術や、嵐や山火事を上空から観測する衛星による画像分析、自然災害を経験する度に改良されてきた最新の津波警報システムなど、大学の研究として進めている防災・減災の先進的技術についても詳細に紹介された。次に、ティルマライヴァサン教授が、特定の化学物質や生物、放射性物質などが原因となって起こり得る人体への危険に触れ、大きな意味ではこれらの危機も災害と定義されるということを知った上で、目に見えづらい潜在的な被害や、災害に付随して起こる影響への対処法について詳細な説明がされた。このような脅威には、PYが既に認識している原発事故や炭疽菌など、人災やテロ攻撃の例も含まれていた。隣国であるスリランカのPYからは、スマトラ沖地震の際に起きた津波の経験が共有され、警報システムや避難誘導の重要性について、実体験が紹介された。

翌日、RGNIYDを訪問したPYは、マドラス大学のクリシュナムティ教授による講義を受けた。講義は、日本とインド、それぞれにおける防災対策について比較する内容であった。教授自身これまでの訪日経験から、津波災害対策として導入されている日本の防災制度にインスピレーションを受けており、一方で、チェンナイで発生した直近の洪水で浮き彫りとなった、インドの防災活動の強さと弱さを解説した。

2か所への訪問を通じて、PYはインドそしてチェンナイに特有のリスクがあること、それらの根底に横たわる課題として、インドの巨大な人口や、技術、専門家、コミュニティの間に溝が存在し、連携を阻んでいることを学んだ。また、チェンナイにおける災害管理が、自国のそれとどのように相似するかについて考えることを通し、出身地の防災対策を向上させるための方策について個人レベルで考えることができ、考察をコース全体で共有することによって防災の在り方を熟考することができた。

教育コース：MOPヴァイシュナヴ女子大学  
(M.O.P. Vaishnav College for Women)

教育コースは、インド屈指の女子大学であるMOPヴァイシュナヴ女子大学を訪問した。校長先生の歓迎スピーチ、大学のカリキュラムに関する説明に続き、学校の歴史と学生のキャンパスライフを記録した動画を視聴した。その後、学生たちによるキャンパスツアーが行われ、図書館、パソコン室、カフェテリア、ラジオ放送局、講堂、編集部、そして、野外にある会議室などを案内してもらった。

学校の取組の中で、PYが感銘を受けたことの一つが、大学が行う就業体験プログラムだった。MOPヴァイシュナヴ女子大学は、大学2年次に、学生に実践的な社会経験の場を提供するために、年間を通じた就業体験をさせている。女性が社会に出て活躍できるよう、大学は日頃から、「成功のためには、困難な目標に向かって懸命に努力するように」とエールを送っていた。学生の中には、既に国内、または世界的な企業で、財務、報道関係、飲食サービス業の管理などの仕事に携わっている者もいる。また、学生たちの活躍は、大学新聞、ラジオ放送（キャンパスの半径5km圏内で放送されている）、そしてキャンパス内に飾られている美術作品や表彰状を通じて常に称えられているということも説明された。学生課の主任が、自ら学生の就職先の開拓に携わっているという話から、PYは大学がいかに熱心に女性のエンパワーメントに取り組んでいるかを理解することができた。主任は、インドが世界中に、洗練された、優秀で柔軟なリーダーを輩出することを強く願うと同時に、全ての学生に対して、10年後、国際社会に通用するリーダーになるようにと教えている。この力強いメッセージから、PYは、優れた学校のシステムは、教育に携わる方々の信念に基づくものであることを実感することができた。

環境コース：インド工科大学マドラス校 インド・ドイツ持続可能性センター (Indo-German Centre for Sustainability (IGCS))

環境コースは、インド工科大学マドラス校、インド・ドイツ・センター(IGCS)という研究施設が、ドイツの研究者と連携して持続可能な発展のための調査、教育、研究を行っている機関、インド・ドイツ持続可能性センター(IGCS)を訪問した。まず、講堂でスディール・チェラ・ラジャン教授にIGCSの取組について話を伺い、その後、PYの興味に応じて三つのグループに分かれ、研究棟の見学及び質疑応答を行った。

PYは、この機関がインドとドイツという環境の全く異なる二国の科学者が持続可能な発展という共通の目標に向けて、水、エネルギー、廃棄物など多方面の分野において、情報交換をしながら共同で研究をしていることを学んだ。コース・ディスカッションの導入でも扱った、「持続可能性の問題は世界全体の共通の関心である」という前提が、改めて議題になった。この機関の国際的な学術交流や情報交換、共同研究の可能性を知り、それはSWYに参加する世界中から集まった青年が、協働することの重要性に気付かせてくれる、貴重な機会となった。この機関で研究する学生は、キャンパス内の移動は徒歩若しくは自転車のみが許可されており、また施設内の食品廃棄物をバイオガスとして再利用していることなど、研究と並行して、キャンパス内部の持続可能性の維

持と向上に取り組んでいることを学んだ。また、船上のコース・ディスカッションで学んだトランジションタウンの取組に、IGCSも注目しているという話を聞き、活発な質疑応答につながった。

訪問を終える間際、PYの一人から、「世界のリーダーとなることを目指す私たちPYに、メッセージをもらいたい」というリクエストに対して、スディール・チェラ・ラジャン教授からは、「未来の世代に対し、私たちは遺産を残していかなければならない(We should leave a legacy.)」という言葉が投げかけられ、PYは大いに刺激を受けた。

RGNIYDでは、ギリ・レンガサミ教授より、気候変動や生物多様性など広範な環境問題に関する講義を受け、その後、同施設の学生たちと小グループごとに与えられた環境問題の課題についてディスカッションをする機会を得た。例えば気候変動自体は地球全体が直面している問題だが、その影響については、国や地域によって規模や現象が異なる。PYは、各国の状況を共有した上で、問題解決のための取組の事例について紹介し合った。

情報・メディアコース：ブラサド・フィルム・テレビアカデミー (L. V. Prasad Film and TV Academy)

情報・メディアコースは、アジア最大の映画制作スタジオ兼制作学校であるブラサド・フィルム・テレビアカデミーを訪問した。大学長であるシャレラヴァシー氏による講義では、インドの文化や発展の歴史について、広く認知してもらうために、映画がどのような役割を果たしてきたかを学ぶことができた。100年を超えるインド映画の歴史を振り返ることで、映画が社会に対して発信してきたメッセージが、啓発や意識改革に貢献した時代もあれば、時には社会の移り変わりや流行の変化によって、映画の在り方が変わることもあり、社会と映画が相互に影響を与え合う関係であることを学んだ。これは、コースで学んだ「メディアは社会を写す鏡である」という考え方に通じるものがあった。

また、ブラサド・フィルム・テレビアカデミーの学生との交流においては、彼らが制作した映画を視聴したり、どのような動機で映画制作を学んでいるのかを尋ねる機会が得られた。動画の視聴は、言葉そのものは分からないながらも大体のメッセージや、制作者の意図が理解できることがあり、PYは、伝える手段として、メディアが無敵の可能性を持っていることを実感した。

翌日に訪問したRGNIYDでは、ウマ・ヴァンガル教授による講義を聞いた。インドの歴史と文化発展について、象徴的な役割を果たしたインド映画をいくつか視聴し、どのように市民の意識に訴えかけるか、共感を促すかという方法について学ぶことができた。PYは、ブラサド・フィルム・TVアカデミーで視聴した映画と併せて、インド映画の特徴や、インド社会が映画をどのよう

に捉えているかについて議論し、フィクションやファンタジーが、媒体として社会でどのような役割を果たすかを考察した。

青年起業コース：インド工科大学マドラス校

イノベーションセンター(CSIE: Center for Social Innovation and Entrepreneurship)

青年起業コースは、インド工科大学マドラス校内のイノベーションセンター(CSIE)にて、研究者や学生を訪問し、講義やディスカッションを行った。CSIEへの訪問で特筆すべきは、CFIの視察だった。環境と社会に貢献する技術革新を目的とし、2007年にインド工科大学マドラス校内に設立されたCFIでは、最新の3Dプリンタなどの機器が揃い、学生たちが日夜発明に取り組んでいる。毎年、世界各地で開催されるロボットコンテストにも常連参加というだけあり、カメラを搭載したドローンや階段を上り下りするロボットなど、学生たちの発明品があちこちに展示されていた。視察中、機械を分解したり組み立てたりする学生たちに、PYは興味津々という様子で質問を投げかけていた。セッション2で、「10年後に消える仕事、現れる仕事」というテーマでディスカッションした際、「Amazonなど大手が取り入れたドローンが流通網として一般化するため、ドローンを操作する人や開発する人、インストラクターが増える」「介護や福祉の分野のように、軍事においても、人間(兵隊)に代わるロボットが増えるだろう」といった発言が多かったが、この視察で見聞きしたことはこの議論を更に掘り下げる機会となった。

その後、在籍している男子学生が、現在取り組んでいるプロジェクトについて発表した。簡単な手順で取り付け可能な、車椅子用の「二足歩行補助シート」だった。現在、実用化に向けて大学と共同で開発している。この発表を聞いたPYは、「名刺交換をするときや、ミーティングを行うときなど、車椅子利用者の人であっても立ち上がって他人と視線を合わせて交流ができることは素晴らしい」と感動していた。まさに、アイデアが社会貢献につながる好例だった。また、JPYからは「日本ではバリアフリーという概念が一般化してきていて、各駅では車椅子用の歩行通路やエレベーターが設置されるようになった。インドではどうか」という質問があった。回答からは、インドではまだバリアフリーに対する社会的取組が弱く、歩行困難な人が外を出歩く際には不便なのが現状であり、だからこそこうした発明が広まることによって、人の意識を変えたり政策に訴えかけたりする動きに期待したい、という発明者の強い情熱がうかがえた。コースで扱った「起業家に必要な精神」を垣間見ることができる素晴らしい出会いとなった。

2月11日はRGNIYDを訪問した。参加青年を乗せたバ